

原因と結果との法則性を発見する行為が実験である 実験と試行錯誤

何か新しいことを始めるとき、確実性を検証するために実験をして、その後本格的な展開をすることが手順原則である。それは、ビジネスのプロジェクト実行の原則である。

実際には、そのことがわかっていて実験をしているつもりでも、実は「試行錯誤」を繰り返している場合が多い。

それは、「実験」という単語と「試行錯誤」という単語の定義を正確に認識していないところから発生する。

実験と試行錯誤とは、似ているようでまったく異質な単語なのである。

実験は、次のような手順で進めていく。

仮説の設定

実行

結果の検証

仮説の正否の判定

否の場合、から再検討して

やり直す

その場合、どこに問題があっ

たのかの観察、その問題はなぜ発生したのかの原因分析、その問題点（欠陥点）を排除するための対策の判断を厳密にやっておくこと、が必要となる。

結果が正ならば、何回か同じ実験例を繰り返し、同じ結果を得たら、その仮説の法則性が証明されたことになる。

の仮説の設定とは、ある種の原因と結果の推定を論理的にしてみ、それを実行によって確かめるための仮定である。

これら一連の論理と行動の展開を実験という。

実務的には、一つの大プロジェクトチームの中に編成された小集団のタスクフォースが、実験担当者となって推進する。

たとえば、店舗現場での作業改善プロジェクトの場合、小分類作業工程の改善を積み重ねて大きな一つのプロジェクトが完成される。

その小分類作業工程の改善案の実験担当チームは、小集団のタスクフォースである。そのメンバーは、

プロジェクトチームの中の比較的職位の高い者をタスクフォースの長として、若い中堅社員が選ばれることになる。実際には、ボランティアで志願者を募るとよい。タスクフォースのメンバーにとっては、その実験参加がキャリアとなる。

つまり実験とは、原因と結果との法則性を発見する行為である。こうすれば、こうなる。こうなるためには、こうすればいいというのを法則性にまで高めて、行動を確実にしたい。

ビジネスは、賭けをするのではなく、80%以上は確実にできることをするのである。

そして特に人間のビジネスは、法則性が必ず発見できる。職人技能は、論理的法則ではなく、職人個人の体験集積による勘によって成立しているものである。

ビジネスは技術であり、技術は経験法則によって普遍化されたものである。

製造業では、膨大な研究開発費を計上して製品開発に取り組んでいる。食堂業が産業となるためには、普遍的な原理原則を技術として駆使できなければならぬ。た

だし非産業の世界、即ち職人技能だけの業界ならまったく話は別になる。そのかわりそれは、特殊な階層のお客の、特殊な利用動機に限定されたビジネスとして、小規模経営に徹底することになるだろう。

さて、実験に反し、試行錯誤は、法則性の発見や論理展開とはまったく無縁である。

広辞苑は、次のように説明する。「動物が学習を行う場合に盲目的な運動を繰り返すこと。課題を解決する見通しが立たない場合、試みと失敗とを反復しながら追求すること。」

つまりここでは、経験を法則にまで高める手続きが欠落している。従来はそのようなやり方が、素直で理屈っぽくなくてよいとされてきた。しかし、試行錯誤はもう終わりにしたい。